

解答

- ① 1 協調 2 的外れ 3 祝日 4 例外 5 省く  
6 努める 7 昨今 8 希少 9 荷札 10 印刷
- ② 問一 1 [部首] あなかんむり [画数] 2 [画]  
2 [部首] かたな [画数] 5 [画] (1・2それぞれくんで)  
問二 1 1 [画め] 2 4 [画め] 3 8 [画め]  
問三 1 イ 2 エ 3 ア 4 ウ 問四 イ・ウ・カ (3つくんで不順可)
- ③ 問一 a ウ b ア  
問二 A エ B ア C イ  
問三 ア・エ (くんで不順可)  
問四 うわさで知っているジャンケンゆうれいに会えると思うと、うれしかったから。  
問五 ウ 問六 エ  
問七 負けると、  
問八 イ 問九 イ→オ→エ→ア→ウ (5つくんで) 問十 ア
- ④ 問一 A ウ B イ 問二 ばくだん 問三 ウ  
問四 人間た～もいる (くんで)  
問五 エ 問六 イ  
問七 1 ひどいやけど 2 右手(右腕) 3 人形をこしらえること  
問八 そこには、～てきます。(くんで) 問九 ア  
問十 昔人形づくりがかんざしを作ってあげた、古いひな人形。

解説

- ③ 出典は、三田村信行「ジャンケンゆうれい」(野上暁編『春ものがたり』(偕成社)所収)。  
問三 ジャンケンゆうれいについて説明されているところを確認しましょう。ア「壁から一本の手がのびてきた」(11・12行め)→○ イ「代わるがわる」とは書いてないので× ウ「ひじから少し上のところでとまった」(12・13行め)とあるので、「手のひらの部分」が× エ「負けると、手はますます青白くほそくなり～本物の手らしくなるのだ」(32・33行め)→○ オ「手はため息のようなものをもらしてひっこんだ」(17行め)とあるので、「勝つまで勝負をやめない」が×  
問四 ——線の直前に注目しましょう。「ヒロキは(ジャンケンゆうれいの)うわさを知っていた」ので、「ジャンケンゆうれいに会える—と思うと」うれしくて、楽しみで「胸がどきどきした」のですね。  
問五 ——線の前を見ると、ゆうれいはヒロキとのじゃんけんにかけていますから、がっかりしてため息を漏らしたのだとわかります。  
問六 ヒロキの期待に反して、ゆうれいの話をしてもみんなの反応は冷淡でした。「ヒロキはその日が四月一日だったことに気がついた。エイプリル・フル。信用されないわけだ」(19・20行め)とあります。つまり、その日がうそをついてもいいエイプリル・フルだったので、ヒロキがうそをついているとみんなは思ったのです。→エ

問七 「そうやって勝ち負けをくりかえしているうちに、ヒロキはあることに気がついた」(31行め)とあります。「あること」とは、直後の32・33行めに書かれています。つまり、手はジャンケンに負けると弱弱しくなり、勝つと元気になるということです。

問八 「いいかげんにしてくれよ～あきちゃったよ」(35行め)というヒロキのことばから、もう嫌になっているのがわかります。→イ

問九 話の展開をしっかりと読み取りましょう。はじめの5回はヒロキが勝つ(イ)→手がうすく、消えそうになる(オ)→だが、手がもりかえし、元気になる(エ)→それから15対15になる(ア)→そして最後の勝負になる(ウ)

問十 30回勝負でゆうれいが勝ったとたん、部屋がぐるぐる回り、一人の男の子がヒロキのかわりに現れます。ゆうれいとヒロキが入れかわったと考えられますね。「信じられないような顔つきで自分の体を見まわし」(54行め)、「はずむような足取りで部屋を出ていった」(55行め)から、男の子がジャンケンに勝ってついに壁から出てこれ、喜んでしている気持ちがわかります。→ア

④ 出典は、立原えりか「花かんざし」(野上暁 編『春ものがたり』〈偕成社〉所収)。

問二 「戦争がはじまり」(18行め)から考えると「ばくだん」ですね。「天から投げおとされる火」(20・21行め)も同じです。

問三 戦争のために町のすべてが焼かれてしまったのですから、「くやしき」や「おなしき」と同時に、戦争に対する「怒り」も感じていたはずですよ。

問四 ——線の後に、「(ひな人形たちが)まるで、人間たちの世界を呪ってでもいるような声をあげながらくずれ、灰になってゆく」(56～58行め)とあります。人形づくりには、燃えている人形たちが、戦争という愚かな行為をする人間の世界を呪っているように思えたのです。

問五 ——線の直前に注目しましょう。「その火を消してやる水が、なかったのです」(59・60行め)とあります。水がないために、人形たちが灰になってゆくのをだまって見ているしかない自分の無力さを詫びているのです。→エ

問六 ——線の後に「(何年か前の朝、)折れかさなって、灰になってしまった人形たちといっしょに」とあるので、この朝は、人形たちが焼けてしまった朝です。その場面をさがすと、「だれひとり、ひな祭りなどできなかった～夜があけたとき」(36～39行め)から始まり、「朝の光は、空に春がきたことを知らせていました」(68・69行め)までです。70行めからは、「戦争がおわったとき」(72行め)のことです。→イ

問七 「人生が燃えつきた」とは、もう人生が終わったという意味です。人形づくりは、今まで人形を作ってきた「右手(2)が、ひどいやけど(1)のために使えなくなって」(77・78行め)しまい、「前のように、人形をこしらえること(3)」(70行め)ができなくなってしまったので、もう生きていけないと思ったのです。

問八 人形づくりが見た光景は「外を眺めました」(101行め)以降に描かれています。美しく咲き誇った桃の花の林の中を御所車がやってきたのです(102～112行め)。

問九 問七で確認したように、人形づくりは右手を失って生きていく希望もなくしていました。ですからこの女の人は「右手」のかわりになって人形づくりを支えるために、お嫁に来たのではないかと考えられますね。

問十 「この世にふたつとあるはずがない、人形づくりがこしらえた、銀の花かんざしでした」(135・136行め)とあるので、「おまえに、桃の花のかたちの、かんざしを作ってあげよう」(8・9行め)と、以前人形づくりが花かんざしを作ってあげた古いひな人形だと考えられます。